
〇〇のお仕事。

保科 郁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

〇〇のお仕事。

【Nコード】

N8337C

【作者名】

保科 郁

【あらすじ】

〇〇のお仕事風景です。少しでもコメディを意識しながら書いてます……が、半ばはシリアスかな？

1

「あゝ、まだ　こんなにあんのかよ。
うっぜえなあゝ」

ある晴れた昼下がりに。

豪華なデスクに足を乗せた、これまた豪華な出で立ちをした男が
ふんぞり返りながらぼやいていた。

横柄な態度とは裏腹に、見た目は麗しく煌^{きら}びやかな男である。
この態度や　低い声音を聞かなければ、少し背の高い女性で通るか
もしれない。

男の視線は嫌そうに、机の上で山積みになっている書類に向いてい
る。

「なあ、もうちょつと何とかなんねーの？」

男は美貌を台無しにする口調で斜め前にいる、一人　黙々とPCを
操作している女性に話し掛けた。

女性は手を止めることなく淡々と答えた。

「それでも　かなり選別してあるのですよ？

それでご不満なら、最初からご自分でなされますか？」

丁寧な物言いとは裏腹に、かなり冷ややかな口調だ。

言葉の端々から冷気が漂ってきている気がする。

どうやら、こちらの女性はとても気分を害していらっしゃるらしい。

「ええ〜？」

マジで選別してあんのかよ。

ありえねえ量だぞ、これ」

男は女性の気配に気付いているのかいないのか…、尚も不満たらたらに文句を言い続ける。

確かに、机に乗っている書類は半端ない量である。

高さ50cmはあるかもしれない。

女性は手を止めると 男の方を向き、にっこりと微笑んと言った。

「そちらは私が選別させていただきましたけれど、……何か？」

何か？…の部分に、殊更 力が入っている気がするのは間違いではあるまい。

顔も笑顔の表情ではあるが 温かみなど全くなく、笑っているようには到底見えなかった。

まるでブリザードが吹き荒れているが如く、凍り付くような笑顔だ。

その刺すような――寧ろ、刺し殺すような気配に　男は居住まいを正し、震える声でのたまった。

「めめ滅相もございませんッ!!!」

冗談です、はい。喜んでお仕事いたします」

さっきまでの横柄な態度が嘘のような謙虚さだ。

まあその態度も、女性の醸し出した気配を思えば無理もないだろう。まさに、生きるか死ぬか……!!の瀬戸際のな感じだったのだ。

「そうですか。

それなら良かったです」

女性は射殺すような気配を無くすと、再びP Cの操作を始めた。

その様子に男は、ほ……と息をつく　こっあふらせそり脂汗をぬぐった。

この女性を本気で怒らせてはいけない……、本能がけたたましく警報を鳴らしている。

男は素直に仕事に取り掛かることにした。

しばらくは紙をめくる音とPCを操作する音しか聞こえなくなった部屋で、けれど数分も置かず男は喋り出した。

「でも、さあ……」

その声音がさっきまでとは様子が違うのに気付いた女性は、顔を上げ 先を促すように男を見た。

男はちら…と女性を一瞥すると、話を続けた。

「実際、この書類 全ての要望を受け入れる訳にいかないのは分かるんだ。

それをする世の中が回らなくなるからな。

だからその中の、ほんの一部を選ぶ訳だが……それを俺が決めていいのか？」

男の顔には苦悩が刻まれていた。

自分の決めたことに生じる結果が、男の肩に責任として 重く乗しかかっているのだろう。

男の立場を思えば、その苦悩も分かりすぎるほど分かっている女性は、静かに返した。

「はい。」

それが あなた様の立場なのですから…」

同情も慰めも…激励さえもせず、女性は淡々と答えた。

どんな慰めも彼の苦悩を払拭することはできないのだと、女性には分かっていた。

彼がその立場にいる限り、その苦悩はずっと続くのだ…。

女性は男に何かを言ったりはしない。

仕事をしやすいように書類を調整し、たまに吐き出される苦悩を静かに聞いて、いつも近くに控えている。

それが女性にできる全てなのだ。

男とは立場が違う女性に、男の苦悩を理解することはできないのだから…。

「そう…か。 そうだな……」

男は弱々しく、自分に言い聞かせるように答えた。

その顔は辛そうな…、今にも泣き出しそうな感じであった。

「……少し、休憩にしましょうか。
お茶をご用意 致します…」

女性は静かに立ち上がると、背後にある扉の向こうに姿を消した。

男は椅子に深く体を預けると、長い……長い……長いため息をついた。
自分の腑甲斐なさを吐き出してしまうかのように。

3

……十数分後。

女性はお茶のセットとちよつとしたお菓子、軽食などをワゴンに乗せ部屋に戻ってきた。

女性は慣れた手つきで紅茶を注ぎ、お菓子を小皿に適当に振り分けると、男の机の上――書類の邪魔にならない所に置いた。

「…ありがとう」

男は礼を言うと、紅茶を少しだけ口に含んだ。

紅茶は熱すぎず温すぎず、男には程よい暖かさで、茶葉の柔らかな香りと共に、体中に染み渡っていった。

きつとこの温度も茶葉も、女性が男のことを考え、選んでくれたのだろう。

男は女性のさりげない優しさを嬉しく思った。

「それと、こちら追加になります」

ほんわかとしていた男を突き落とすかのように、女性は青いファイルを差し出した。

男はそれを反射的に受け取ると、苦虫を噛み潰したように表情を変えらる。

「…げッ！

まだあんのかよ!？」

さっさと自分の席に戻り 優雅に紅茶を楽しんでいた女性が、男性の言葉に目を光らせた。

その目線に 男は慌てて口を押さえるがもう遅い。

一度出してしまった言葉は取り返しがつかないのだ。

「因みに、今 お渡ししたファイルが優先ですので。

先に目を通してくださいませね」

につこりと微笑んで言う女性に、男は素直に返事をするしかなかった。

……例えそのファイルが、厚さ10cmはあろうとも。

男は女性に気付かれないよう そつとため息をつくとき、ファイルを静かにめくりだす。

…が、その手はすぐに止まった。

ファイルの内容が思っていたものとは違ったからだ。

目をぱちくりさせてこちらを見ている男に、女性は ふわり…と優しげに微笑み返した。

「そちらは今日 届いた、感謝のお気持ちです。
今日はお願いで、早く戴いてきました。

毎日どんなに仕事が遅く終わられても、必ずそちらに目を通されますよね」

その言葉に 思わず目頭が熱くなった男は、それを堪^{こら}えるようにフ
ァイルに視線を戻した。

女性のいう通りだった。

男はどんなに遅くなろうと、どんなに疲れていようと、毎日これを
読んでいた。

そうすることで 折れそうな心を立て直してきたのだ。

それを女性が知っていて 氣遣ってこれを持ってきてくれたことが、
男に目頭を熱くさせた。

「あ…当たり前だろ。 これに目を通すのも仕事のうちだからな」

嬉しくて、嬉しすぎて泣き出してしまいそうなのが恥ずかしくて、
男は減らず口をたたいた。

女性にはそれが解っているのだろう、表情は穏やかなままだ。

「…そうですか」と静かに返す。

実際は感謝の気持ちばかりではなく 聞くに堪えない罵詈雑言も多
々あったりするのだが、見ない訳にはいかないのだ。

男が決断したことの結果なのだから。

それに感謝の気持ちは、本当に涙が零れるくらい嬉しい。
ああ、この仕事をして良かった…と心から思える。

男は顔を綻ばせながら…、時折 辛そうにしながら、ファイルを読み進めていった。

しばらく穏やかな時が流れ、半分くらい読み進めた所で男は手を止めた。

「んじゃ、張り切って仕事すつか！」

その顔に苦悩の色は見えない。

無くなった訳ではなく、見せないようにしているのだ。

それを見た女性は、穏やかに微笑み 静かに返事をした。

「……はい、神様」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8337c/>

〇〇のお仕事。

2010年12月3日06時14分発行